

Title	シンポジウム「環地中海都市の慈善と救貧：中世から近世へ」：序言
Sub Title	Charity and poor relief in medieval and early modern Mediterranean cities : preface
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.117(341)- 120(344)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム「環地中海都市の慈善と救貧：中世から近世へ」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 序言

長谷部 史彦

二〇一六年度三田史学会大会の午後に催された本シンポジウムは、二〇〇〇年度の同学会大会のシンポジウムと一六年の歳月を隔てた再検討の企画であった。<sup>(1)</sup>そこでは、中世から近世へと視界を広げながら、西アジア起源の三つの一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）が展開した「拡大地中海世界」、すなわちヨーロッパと中東イスラーム圏を併せた広域の、特に都市社会における貧困（poverty、アラビア語で faqr）と慈善（charity、アラビア語で ḥiṣān 或いは birt）に関わる様々な問題について、多角的な考察検討と分野越境的な意見交換が試みられた。

中近世のヨーロッパ史における慈善と貧困に関しては既に相当の研究蓄積があるが、中東イスラーム圏のこのテーマの研究は、アダム・サブラのモノグラフの出現

（二〇〇〇年）を機に活性化したといつてよからう。<sup>(2)</sup>その後、イスラーム初期から近現代に至る中東各地の慈善を取り扱い、近世ヨーロッパ史家の N・Z・デーヴィスが結語を述べた論集（二〇〇三年）が編まれ、さらには、ヨーロッパと中東を繋げて三つの一神教における慈善の実相を比較対照する企画も現れた。<sup>(3)</sup>そうして振り返ってみれば、手前味噌ながら、三田の山における二〇〇〇年のシンポジウムは草分け的な試みとしてよいかもしれない。

以下の諸論攷は、二〇一六年のシンポジウムの二つの講演と二つのコメントの内容を敷衍して活字化したものである。近年の研究の進展の帰結として内容は多岐にわたるが、その特徴をあえて言明するならば、慈善機能に備えた都市施設を視野の中心に据える傾向の強かった二

〇〇年のシンポジウムと異なり、都市社会の地縁的・社会的な結合に基づく貧民救済や相互扶助をめぐる諸問題を重視する点にあるといえるだろう。

ヨーロッパ史における当該テーマ研究を先導してきた河原温氏の論文は、二〇一〇年代に入って刊行された二つの重要論集を中心にこの二〇年間の中世・近世ヨーロッパに関する研究動向を概観し、そのうえで、ネーデルラント諸都市の比較史研究の視座を堅持しつつ、ブルツへの教区貧民の救済組織である聖霊ターフェルの慈善活動と運営に的を絞って詳論し、新たな研究の地平を拓いている。続く藤木健二論文は、近世のオスマン帝国都市に関する慈善・救貧研究についてその展開・到達点・課題を総括したうえで、一八世紀前半の帝都イスタンブルに居住する多くの障害者を含むズインミー（イスラーム国家の異教徒住民）の物乞いに関するオスマン語のユニークな台帳記録を取り上げて詳解し、検討を加え、今後の研究の可能性の所在を探り当てている。そして、ヨーロッパ圏とイスラーム圏の西方の「境域」を歴史研究のフィールドとする関哲行氏と佐藤健太郎氏によるコメントは、二つの講演への専門的な反響としてそれぞれにさらなる思考を促すのみならず、未だに両歴史文化圏を平

然と別世界として扱う研究姿勢を揺動させる構えを顕示する点でも示唆的であると思われる。

序言としては蛇足であるが、当該シンポジウムの司会を担当した筆者のイスラーム政権下のズインミーに関する補論の要点もここに覚書として付記させていただきたい。

一つ目は、受益者の設定に関して一定の制限があったが、ズインミーがイスラームの慈善的寄進制度であるワクフ制度を活用していたという点である。一三二四年、カイロの中心部に住むカライ派ユダヤ教徒のラシード・アブー・アルビシユルは、父親から相続したカーヒラ地区南部の住宅の持分（二分の一）をワクフ物件とし、その賃貸による収益の受け手を自らの妻で同じくカライ派信徒のスィット・アッシャームとした。そして、彼女の死後の受益者については優先順位をつけて、①カイロとフスタートのカライ派の貧民、②出身を問わずカライ派信徒の貧民、③ヘブロンユダヤ教聖域の維持、④あらゆる貧民というかたちで指定したのである。これは「家族ワクフ」と同様の在り方を示す具体例といえよう。また、オスマン帝国期アレppoのマロン派キリスト教徒が設定したレバノンの修道院向けのワクフでは、施設その

ものでなく「修道院の貧者」を寄進対象（受益者）に指定する形がとられていた。<sup>(5)</sup>すなわち、アラブの大都市のワクフ物件が生み出す賃貸収益がレバノン山岳部の修道院の運営を支えていたわけであり、都市の社会経済に貢献するというワクフの一般的傾向と異なっており、都市の富が僻地へと還元されていた事例としても興味深い。

二点目は、施しを受ける側にあつたズインミーの貧民の視点や心情を具体的に把握することの困難を乗り越えようとする研究の出現である。中世フスタートのベン・エズラ・シナゴウのゲニーザ文書を用いたM・R・コーエンの研究では、たとえば、困窮し債務を抱えて身を隠し、残した家族を案じるファーターイマ朝後期アレクサンドリアのユダヤ教徒のヤフヤー・ブン・アンマールが救済を求めて作成した、ユダヤ・アラビア語のラビ法廷宛ての嘆願書が翻訳・検討されている。<sup>(6)</sup>マイノリティの経済弱者の「肉声」を掘り起こした貴重な仕事として今後の指針となる。

#### 註

(1) 二〇〇〇年の三田史学会大会シンポジウムの内容は、大月康弘、関哲行、三浦徹、伊原弘、長谷部史彦の論攷

からなる長谷部史彦編著『中世環地中海圏都市の救済』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年としてまとめ直された。

(2) Adam Sabra, *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mantuk Egypt, 1250-1517*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000. 中世イスラーム圏に關しては Yacov Lev, *Charity, Endowments, and Charitable Institutions in Medieval Islam*, Gainesville: University Press of Florida, 2005; Ahmed Ragab, *The Medieval Islamic Hospital: Medicine, Religion, and Charity*, Cambridge: Cambridge University Press, 2015 などが刊行され、Amy Singer, *Charity in Islamic Societies*, Cambridge: Cambridge University Press, 2008 のほか近年イスラーム帝國史家の手になる俯瞰的総論が登場した。

(3) Michael Bonner, Mine Ener, Amy Singer, ed., *Poverty and Charity in Middle Eastern Contexts*, Albany: State University of New York Press, 2003. ネット上で中世イスラーム圏のユダヤ教徒社会を専門とする M・R・コーエンの序論 Mark R. Cohen, "Introduction: Poverty and Charity in Past Times", *Journal of Interdisciplinary History*, vol. 35, no. 3 (2005), pp. 347-360 から始まる同誌の特集<sup>6</sup>及び Miriam Frenkel and Yacov Lev, *Charity and Giving in Monotheistic Religions*, Berlin: Walter de Gruyter, 2009.

(4) Donald S. Richards, "Arabic Documents from the Karate Community in Cairo", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 15/1-2 (1972), pp. 111-112.

(5) Stefan Knost, "The Christian Communities in Ottoman

Aleppo and the Role of Religious Endowment (waqf) in the Construction of Translocal Spaces”, in *Human Mobility and Multithnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1 : Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut*, edited by Hiidemitsu Kurroki, Tokyo : IICCA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015, pp. 48-50.

- (9) Mark R. Cohen, *The Voice of the Poor in the Middle Ages : An Anthology of Documents from the Cairo Geniza*, Princeton : Princeton University Press, 2005, pp. 16-22.